

編集後記

実験農場は当時の荃崎町に再開所してから令和4年で59周年となった。これを機会に、日本農業研究所五十年史以降の実験農場（以下、農場とする）の歩みを刊行することになった。

本書は、経過（農場の歩み）と成果に関する3つの章、資料編（職員、課題、等）から構成されている。各章の一つ一つに先人の達見とともにご苦労が刻まれているように思われる。

1章は1995年度以降2005年度までに取り組まれた課題について、農場問題検討会用に準備された資料（当時の川口専務理事の作成による）を利用させて頂いた。

2章は、2003年度以降に農場が中心的に取り組んだ、肉用牛の子牛生産の実績を中心にして取りまとめた。内容の多くは定期刊行物である「農業研究」誌に報告した。

3章は外部機関の支援・協力による課題の成果として、農林水産省の補助事業（環境保全型農業）、特用家畜としてダチョウの飼養管理（日本中央競馬会特別振興資金助成事業）、廃棄野菜等の安全で高品質な飼料への再生・利用技術の開発及び粗飼料多給による日本型家畜飼養技術の開発（農林水産省のプロジェクト）、ウシ体外受精胚由来栄養膜小胞と胚との共移植が受胎率に及ぼす影響（農研機構畜産草地研究所との協定研究）等について紹介した。

資料編の1として職員の記録、2として外部事業、委託・協定研究、3として委員会等の委員、4として「農業研究」誌の掲載論文と執筆者の氏名・所属、5として実験農場農地の農業生産法人等の使用及び土地売却に関する経緯を掲載した。

ところで、私が農場での勤務を開始したのは2006年4月からである。しかし、農場を初めて訪問したのはその二十数年前に遡る。埼玉県北本市にあった農事試験場畑作部がつくばに移転して間もない頃、近くに日本農研の農場があることを知って、研修として業務職員と一緒に見学させて頂いた。当時、移転したばかりの研究団地は樹木がまだ小さくて緑は少なかったが、農場は移転してから既に十数年が経っていたので樹木も大きく緑が豊かであったことを鮮明に記憶している。農林研究団地も今後年月が経つと緑豊かになるのかと希望を持たせて頂いただいた次第であった。

また、個人的なことで恐縮であるがお二人の元職員との繋がりを追加させて頂く。大学生の時に大変お世話になった教授のお一人が1944～1945年に日本農業研究所（当時は、東亜農業研究所）に在籍されておられたことを初めて知り感慨深いものを感じ、エネルギーな先生の若かりし頃を想像した。もうお一人は、農場がつくばに移る前に東京にあっ

た時代に農場におられた方がその後に埼玉県北本市にあった農事試験場畑作部の総務分室におられて職場がご一緒の時期があった。その当時、何人かのグループが近くの農家の農地を使わせて頂いて家庭菜園を楽しんでいたが、その方の野菜造りがグループの中で一番お上手で、農場で経験を積まれた成果であったのではと思い出される。

実験農場が当地に移転してすでに長年月が経過し、五十年史の記載以降を受け継ぐこともこの資料だけでは十分に役割を果たしていないかもしれない。次の機会に期待したい。

客員研究員 小川増弘